

「赤ひげ」今井医師、古巣へ



回診中も心の触れ合いを大切にする今井院長(左)と近森リハビリテーション病院で

東京・下町の赤ひげ医師、高知の古巣に帰る。浅草に診療所を開設し、地域に密着したりハビリ医療に取り組んできた今井稔也医師(40)がこのほど、近森リハビリテーション病院(高知市北

浅草で地域密着のリハビリ9年

本町1)の院長に就任した。駆け出しの5年間を過ごした病院へ9年ぶりに戻った今井院長は、高知で理想のリハビリ医療を実現しようと意気込んでいる。

【袴田貴行】

今井院長は高知医科大学(現高知大医学部)を卒業後、同病院で勤務。リハビリ医として、主に脳卒中などで身体に障害を負い、日常生活への復帰を目指す患者をサポートしてきた。

平日は外来を担当。休日は診察に來られず、地域にリハビリ医もいない退院患者の自宅へ往診。「義務ではなかったが、

理想の医療、高知で実現へ

行かなきゃいけない患者がいたら、足を向けるのが医師の仕事」。県内を飛び回り、休みなしの5年間を送った。やがて、当時の院長で「回復期リハの卓分け」と呼ばれる石川誠医師(現医療法人財団・新誠会理事長)が、「在宅・自立支援を柱とした真のリハビリを東京で実践しよう」と決意。その役割を今井院長に託した。97年10月、当時31歳だった今井院長は東京都台東区に「たいとう診療所」を開設する。台東区は高齢化率が23・3% (4月1日現在)で、東京23区で最も高い。院長で風呂のない家、はしごのような階段、住宅が密集し、改修もままならないなど、下町の居住環境は自宅療養患者にとって厳しく、頻繁な外出は難しい。今井院長は外来を終えると、スクーターや自転車にまたがって患者宅を往診して回り、地域に密着したりリハビリ医療に取り組んだ。「ただ診察するだけじゃ、患者さんは元気にならない。人が人を診るとまだまた続く。東京での実績を買われ、180床を擁する病院の院長に抜てき。「急速な高齢化など課題は多いが、高知の人たちによりよいリハビリ医療を提供できるよう全力を尽くしたい」。舞台は変わったが、熱血医師の闘いは